

## 福島県南相馬市でのボランティア作業を終えて

2013年5月19日（日）～5月23日（木）

5月19日に出発し、20・21・22日、3日間の作業を無事終えて、23日に帰ってきました。

貴重な初体験でありました。

企画してくれた川澄さん、宿舎の手配、仮設住宅の方々との懇談など、行き届いた心配りにはただただ感心するばかりです。

同行の佐野さん・櫻井さん・阪西さん・星さん、食事の準備や宿舎の設営などいろいろお世話になりました。ありがとうございました。

私たちの宿として、新築の倉庫とテーブルや椅子などの器材、コンクリートの床に敷く畳などを貸して下さった、いろは屋肥料店の鈴木様ご夫妻、その仲立ちをしてくださった紺野様にもお礼を申し上げなければなりません。

鈴木様ご夫妻は、原発事故で点々と避難されて神奈川県まで行かれたとか、今はまだ家業もままならず、新築の倉庫も使用されないままで置かれています。一刻も早い時期に順調なお仕事ができるように祈るばかりです。

紺野様は今も新潟市に避難中で、新潟市の臨時職員をされながら、趣味の山の仲間を見つけて融けこまれ、生活しておられる。芯の強さと柔軟さを持った生き方、とても素晴らしいことです。

私たちがここに来る前、「震災後2年余も経過しているのに、今更ボランティアというのはい自己満足のためではないのか」と言われた仲間もいたようで、実際に行って何ができるのだろうか、本当に役に立つことができるのだろうか、という逡巡を感じていたのは、話し合ってみると私だけではなかったようです。

作業を終えてそれぞれの家に帰る道すがら、国道12号線で飯館村を通ると除染作業をしている様子が見られました。税金で行う公共関係の復興はすすんでいるのでしょう。しかし、私有財産（家屋、家財、庭）の整理や処理、内外の清掃等は個人で行わなければならないのです。



宿舎前から いざ出発

私たちは南相馬市の小高区に入ったのですが、この地域はようやく立ち入り禁止が解かれ、住民の方々には2年ぶりに我家の姿を見たわけですが、無残な姿に圧倒され、瓦礫処理や壊れた家財の処理は高齢の被災者にはどうすることもせず、誰かに頼るしかないのです。

これら個人の家の内外の整理、破損した家具などの処理、清掃等は、ボランティアの手によってようやく緒に就いたばかり、これからが個人の民家レベルの復興本番です。たとえ私たちの小さな力であってもこの人たちを手助けすることによって、この人たちが自分たちの大切な故郷に帰ることができるようになるのだと、3日間の作業を通じて感じたのでした。

今は心から、自己満足だとか、役に立つのだろうか、という杞憂はなくなったとすることができます。そして、もっと手助けをしなければならぬと。

とは言っても、宿舎も食事も足も全て自分で工面するというのは、ボランティアをする側にとってはかなりハードルが高いことであり、何か良い工夫はないのだろうかと思いつつ、その中でも個人で参加されている若い方々も大勢いて、報道などで知ってはいましたが改めて偉い人たちだと感じたことでした。

### 参加者

リーダー	川澄 昂	メンバー	阪西 保
メンバー	佐野 太	〃	星 富夫
〃	櫻井 明	〃	勝沼正敬

私たちの宿舎は、いろは屋肥料店の鈴木様のご厚意により倉庫をお借りすることができたことは書きました。倉庫内の様子をお見せしましょう。



宿舎（テント村）

特記すべきは、テントの下に鈴木様が届けてくださった畳が敷かれていること。寒さもコンクリートの堅さも感じることなく、快適でした。

遠くに一人用のテントが見えます。なぜ？

次は、お借りしたテーブルや椅子のセットが終わり鈴木様ご夫妻・紺野様とお茶をいただいている写真と、もう一枚、敬意を込めて鈴木様とこの活動の発案者である川澄リーダーの写真を載せましょう。



鈴木様（左端）と奥様（右より二人目）、紺野様（右端）



鈴木様（右）と川澄リーダー



紺野様を囲んで



小高地区の仲町ボランティアセンター

朝 8 時半。ボランティアセンターに集合して受付を済ませ、その日の作業場所と作業内容の指示を受けます。作業の内容により道具類置場から道具を選んで持ち出して、現場に向かいます。

作業するお宅の方と挨拶し、津波で亡くなった方々へ黙祷を捧げて、作業が始まります。

今回お手伝いさせていただいた三軒とも、ご主人が 84 歳、82 歳、80 歳と話しておられました。そんな訳で、個人のお宅で作業するボランティアはいくらでも必要とされているのではないかと思います。

一日目に私たちが作業を行なったお宅では、津波は届かなかつたけれども、地震で屋根が壊れ雨漏りのため多くの家具などが使えなくなったようです。それら家具を解体して、可燃物（紙・衣類・布団など）・不燃物・金属・ガラス・プラスチックなどに分別して大きな産業用のトン袋と呼ばれる袋に詰める、という作業でした。

その袋を、後日、クレーン車のような機械で吊り上げ、処理場に運ぶ、と言うことのようにです。

下の写真は、解体を終え、分別・整理に取り掛かっている場面です。



作業風景

このお宅で廃棄したい家具類を屋根のある駐車スペースに運び出したのも、ボランティアの方々の仕事だったのでしょ。

二日目のお宅も津波の被害はなく、新しい建物はほとんど無傷の状態で、依頼された作業は室内の清掃（壁や床、天井など）とガラス拭き、庭の草取りなどでした。

到着したとき奥様は、掃除をお願いしたので女性が来てくれると思っていたと言っておられましたが、私たちが参加した3日間、女性のボランティアには一人も会いませんでした。

原発の事故以来、住んでいない室内は何度か通われて整理をされていたように見受けられましたが、天井から壁には蜘蛛の巣の跡や埃、板の床は力を入れて拭けば拭くだけ明るくなって、時間と床磨きの道具があればもっと磨いてやりたいものと思いました。

この作業も、重量物の移動のような体力は不要ですが、床や壁、天井と結構体を使う作業でした。

敷地内にあるもう一棟の建物は、築80年以上経っていると言っておられましたが、地震によって今にも崩れそうになっていて、公費で解体整理してもらうことになっているということでした。

三日目のお宅は、津波の直撃を受けた建物だということでした。新築のように見えたが、改修されたものだそうです。部屋の部分はすっかり流されたけれども、残った柱をそのまま利用して直したのだと言っておられました。ここは海岸から直線距離で2.5キロメートルほど、海拔も5メートルと「国土電子ポータル」の地図にあります。

流れ着いた瓦礫などは整理・搬出され、建物を補修したときに出たものをトン袋に詰めて置いて



三日目の作業もほぼ終了



昼食風景 毎回こんな感じ

あったものの、持って行って貰えず月日が経って袋が劣化してしまい、それを再びトン袋に詰め替えるという作業でした。

ご主人は、縁側から見える瓦礫の山が低くなって向こうが見えるようになったと喜ばれますが、今後1年もこのままだったら、また詰め替え作業をしなくてはならなくなるでしょう。

そのほかに、側溝の掃除や除草などの作業もあるようです。いずれにしても、体力の必要な作業ばかりです。

作業を終えて一番思ったことは、この後、いつになったらここに人々が住むことができるようになるのだろうか、と言うこと。そして我々の作業の後、すぐにでもあの方たちがそこに住むことができているなら、もっとやり甲斐を感じる事ができたららうに、と言うこと。

今回のリーダーの川澄さんが市役所の担当者に掛け合って、幾つかある仮設住宅団地のひとつに住む方々、自治会長他10数名の方々の話を聞く機会を持つことができました。そこには40のご家族が暮らしておられるということでした。

皆さん明るくて人懐っこくて、人って強いなあと感じたのですが、『花は咲く』を歌うことがありますかと川澄さんが聞いたとき、「歌わねえ」と一言。それ以上突っ込んで理由を聞くこともできず、その話はそれっきりで終わりにりましたが、復興支援ソングなどと言ってもあの人たちにとってそれがどういうものなのか、故郷を離れて避難している人たちの前で歌って良いものなのだろうか、もしかしたらあの地震・津波・原発事故の当事者ではない私たちの、独りよがりだったのではないだろうかと考えさせられたことでした。

一日目の作業の後、海岸まで行ってみました。  
本当に広い範囲がこの写真のような風景になっていました。



原町区小沢の海岸付近で見た一本松

中央に横長のものが二つ見えますが、川の水門です。もともと海拔の低いところで、高潮の時など海水の浸入を防ぐためのものでしょう。

ここにも一本松があります。話題にもならず。一本松の右手には谷地排水機場の建物だけがポツンと残っていました。

地図を見ると、排水機場から 200 メートルほどで海岸線になります。この写真を写すために立っているこの場所から右手の海岸にかけても、何十軒かの家々が建っていたようです。

次の写真。コンクリート製の防波堤が破れているのが見えます。丘の斜面の裸地は、津波に洗われた跡なのでしょう。防波堤と丘の下からこちら側、地図では何軒もの家が建っていたように、家々の形が書き込まれています。



破れた防波堤と斜面を抉られた丘



津波の通り道の跡

左の写真は上の写真の下部に写っている道路を、右に 200 メートルほど丘に向かって緩く登

った地点で、丘の右手にあたります。

中央の建物の右と左を津波が通り抜けたのでしょ、崩れた跡には草も生えず、土台を削られ左に傾いて、今にも倒れ落ちそうです。

船もそのまま置かれています。

船のあるあたりの道路は標高 5 メートル、建物が立っているところは標高 10 メートルです。



3 日間の作業を終えてボランティアセンター前で



夕食風景 これは最後の晚餐

復興・復旧はまだまだです。原発事故が終息し、その汚染が無くなって本格的な復興の手が入れられるようになることを祈っています。

電柱だけは広い荒れ野の中の道端に、新しく立て巡らされていました。

勝沼 正敬 記



小高区役所の放射能モニタリングポスト  
0.128 マイクロシーベルトを示している。

(この写真を含め、多数の写真を櫻井さんから提供いただきました。ありがとうございます。)